

〔課題演習報告〕

生活・学習習慣の改善を基盤とした児童の学力向上に関する研究  
～学校と家庭との連携を図る学力向上コーディネーターの取組を通して～

A Study of Academic Ability Development in Elementary School Students Improving Life and Study Habit  
- Efforts of Academic Development Coordinator Constructing Home and School Partnerships -

永 江 慶 子

Keiko NAGAE

福岡教育大学大学院教育学研究科教職実践専攻学校運営リーダーコース  
志免町立志免東小学校

(2015年1月6日受理)

児童一人ひとりに、確かな学力を形成することが重要な教育課題となっている。児童の学力を維持・向上させていく取組は、授業改善や補充学習を中心に学校だけで進められていることが多いが、児童の学力に家庭での生活・学習習慣が関連していることは、先行研究でも指摘されている。そこで本研究においては、学校と家庭が連携して児童の生活・学習習慣を改善し学力の維持・向上に繋げていきたいと考えた。本研究のキーパーソンは学力向上コーディネーターである。学校と家庭との連携を図る学力向上コーディネーターを中心とした組織的・継続的な取組によって、在籍校児童の生活・学習習慣の改善と学力の維持・向上を試みた。実践の結果、学力向上コーディネーターを中心とした学校と家庭との連携によって、児童の生活・学習習慣の変容が、学力の向上に繋がる一定の成果が得られた。

キーワード：学力向上、学力向上コーディネーター、生活・学習習慣の改善、学校と家庭の連携

## 1 主題設定の理由

### (1) 現代社会の要請から

児童一人ひとりに「確かな学力」を形成することが、重要な教育課題になっている。「確かな学力」を形成するためには、「確かな学力」の定義や福岡県における教育動向を理解し、自校の実態や課題を分析した上で課題解決に向けた取組を行わなければならない。福岡県の公立学校においては、学校長が定めた学力向上プランを推進していくリーダーとして、学力向上コーディネーターが設定されている。児童一人ひとりに、「確かな学力」を形成するために、学力向上コーディネーターを中心とした組織的・継続的な取組の充実が求められている。

### (2) 志免町・在籍校の課題から

志免町は平成24年度から、福岡県教育委員会よ

り、3年間の学力向上推進強化市町の指定を受けていた。この指定を機に、志免町教育委員会では「学校と家庭の相乗効果で学力を育む志免町教育～スリーアップ運動を通して～」をテーマに掲げ「授業改善」「補充学習」「家庭学習」の3つの柱で学力向上に取り組んできた。その結果、全国学力・学習状況調査においては、町全体での取組が進展し成果を示しているが、今後も学力得点を一定の水準に維持していかなければならない。

在籍校においては主題研修を通して児童の「主体的な学び」を育てる研究に取り組んでいる。平成24年度の標準学力調査（東京書籍）においても学力向上の取組が機能し、成果が見え始めてきたが、この成果を安定的に維持していくことが、在籍校の課題である。学力向上コーディネーターを中心に在籍校の課題解決に向けた取組を推進していくための方途を再考する必要がある。

### (3) 先行研究から

学力向上をテーマにした先行研究においては、児童の学力実態を適切に把握し、授業を積極的に改善して、成果を上げた事例が多く報告されている。しかし、田中勇作（2008）は、「個々の教師による授業改善への取組だけで、豊かな学力を確かに育成するには決して十分とは言えない」「授業改善の様々な取組に加え、保護者・家庭を巻き込んだ家庭学習の充実への取組が重要である」と述べている。また浜野隆（2009）は、「子どもの生活環境や親の接し方が、子どもの学力と関係があるのではないか」という視点で学力高群（A群）と学力低群（D群）の特徴を分析し、以下のように調査結果をまとめている。

- 家庭内の文化的環境や子どもへの知的な働きかけ、親の普段の行動は、学力と強い関係がある。
- 子どもの家庭での学習日数や時間、学校学習の利用、学習方法、家庭での環境や生活、親との会話は、学力と強い関係がある。

これらの先行研究から、家庭での生活・学習習慣が、子どもの学力に影響を与える要因になると捉えた。そこで、先行研究の分析結果を参考にしながら、在籍校児童の学力向上に関わる課題を明らかにすることにした。その上で学校と家庭それぞれが役割や責任を自覚し、ともに連携しながら学力向上に向けた取組を、学力向上コーディネーターがマネジメントしていくこととした。

### (4) 一年次の研究の概要から

一年次は、在籍校児童の生活・学習習慣についての調査を行い、それらを基盤に学力向上コーディネーターの役割を明らかにする研究を行った。具体的には、在籍校における児童の生活・学習習慣について調査を行って課題を分析し、分析データを活用しながら課題改善に向けた取組を5年生で先行実施した。その結果、学力向上コーディネーターには、以下のような役割があるという結論に至った。

- 児童の学力結果を、生活・学習習慣と関連させて、データの収集・分析を行うこと。
- データ分析に基づいたプレゼンテーションを行い、他の教員や保護者と情報共有や取組の共通理解を図ること。
- 児童の学力を維持・向上させるために、教員・児童・保護者への働きかけを具体的にマネジメントすること。

これらの役割を踏まえ、在籍校における学力向上コーディネーターを中心とした取組を推進していく上で、課題を以下のように定めた。

- 児童の課題に関する学校と家庭の情報共有
- 学校と家庭における役割の明確化
- 児童の家庭学習に関する継続的な指導
- 児童の規則正しい生活の習慣化を目指す取組

以上のことから、本年度は、学力向上コーディネーターを中心とし、教員や保護者を巻き込んだ学校と家庭との連携によって、児童の生活・学習習慣の改善と学力の維持・向上を目指したより実践的な研究を行っていくこととした。

## 2 研究主題・副題の意味

- (1) 「生活・学習習慣の改善を基盤とした児童の学力向上」とは

「生活・学習習慣の改善を基盤とした」とは、家庭での規則正しい生活リズムの確立と、家庭学習の時間の確保や学習内容の充実を図るものである。「生活・学習習慣の改善を基盤とした児童の学力向上」とは、まずは児童が生活・学習習慣の改善を行い、そのことを前提としながら、自ら学び、よりよい将来に向けて能力を獲得し、学力を維持・向上させていくことである。

- (2) 学校と家庭との連携を図る学力向上コーディネーターの取組」とは

「学校と家庭との連携」とは、教員と保護者の双方が、児童の生活・学習習慣に関わる実態や課題を共有し、互いの役割を明確にして改善に向けた児童への働きかけを双方から行うことである。

「学校と家庭の連携を図る学力向上コーディネーターの取組」とは、学力向上コーディネーターが児童への直接指導を行ったり、教員や保護者を通じた児童への間接指導をマネジメントしたりすることである。

学校の経営ビジョンに基づく学力向上プランにおいて、組織の中核を担うのは、学力向上コーディネーターである。これまで在籍校における学力向上コーディネーターの役割は、授業改善や補充学習、授業研究を中心とした学校内の研修に関する取組に焦点化される傾向にあった。しかし、教員による学校での取組だけで、児童の学力の一定水準を維持することには、限界がある。そこで、①教員や保護者が児童の課題を把握し、②学校と家庭がそれぞれの役割を明確にしながら、③学校と家庭の双方からの働きかけによって、児童の学力向上を目指すことが出来るよう、学力向上コーディネーターは、教員だけでなく児童や保護者も巻き込んで、組織的・継続的に取組を進めていくこととする。

### 3 研究の目的

生活・学習習慣の改善を基盤とした児童の学力の維持・向上を実現するために、学力向上コーディネーターを中心とした学校と家庭の連携の在り方を究明する。

### 4 研究の仮説

学力向上コーディネーターが中心となり、学校と家庭の連携を図る取組を進めていけば、児童の生活・学習習慣を改善し、学力を維持・向上させることができるであろう。

#### 【具体的方策】

本研究においては、在籍校の学力向上コーディネーターとの共通理解と協働実践により、以下の3つの取組を行う。

#### (1) 児童の課題の把握と情報提供

①児童の課題を把握するために、アンケート調査を実施してデータを収集・分析する。

②教員と保護者に対して、児童の実態や課題を把握してもらうための情報を提供する。

#### (2) 学校と家庭の役割の明確化と推進組織の編成

①児童の生活・学習習慣の改善に向けて、学校が担う役割（学校での働きかけ）と家庭が担う役割（家庭での働きかけ）を整理する。

②学校・家庭が取組を推進していくために、学力向上コーディネーターを中心とした推進組織を編成する。

#### (3) 学校と家庭の協働実践に対する支援

①スケジュールカードを作成し、活用を促す。

②生活・学習ナビを作成するためのマネジメントを行う。

以上のことを図に示すと、図1のような研究構想図になる。

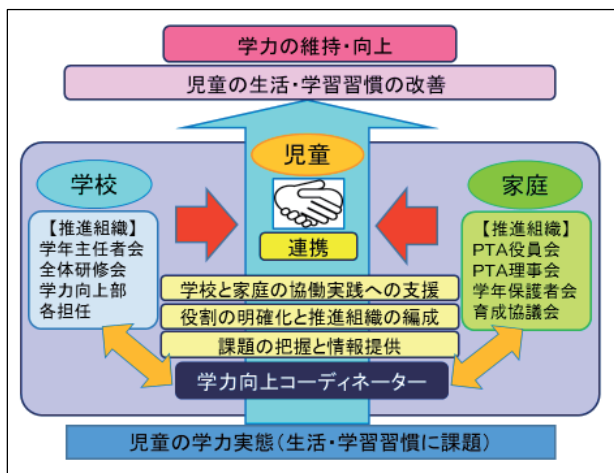


図1 研究構想図

### 5 研究の実際

#### (1) 児童の課題の把握と情報提供

①児童の課題を共有するために、アンケート調査を実施してデータを収集・分析する。

#### 【児童の課題把握におけるマネジメント】

- ・児童アンケートの作成とデータ処理
- ・管理職へ研修会実施の説明
- ・研修会の日程調整
- ・児童の課題把握と資料作成
- ・他の教員や保護者との意見交流
- ・児童への指導の方向性の確認
- ・研修会のまとめ作成

児童の生活・学習習慣における課題を把握するために、保護者の関わり、生活習慣、学習環境、学習意欲、学習内容を観点別に整理したアンケートをもとに実態調査を行った。

本年度は、調査対象児童を5年生だけでなく4年生と6年生にも広げ、32項目の質問に4件法で答えていく用紙を作成した。データの読み取りや集計の効率化を図るため、学校評価の支援システムSMP (<http://smp.sfc.keio.ac.jp/sess2009/>) を活用し、マークシート型のアンケート用紙を作成して、調査を行った。

アンケート結果を学年ごとに集計した結果、学年が進行するにつれ、保護者の関わりの減少、就寝時刻の未設定等が明らかとなった。また、学力A群と学力D群に分けて分析したところ、図2に示す通り、学力D群の児童ほど、平日における家庭での学習時間は短く、テレビやゲームに多くの時間を割いていることが分かった。

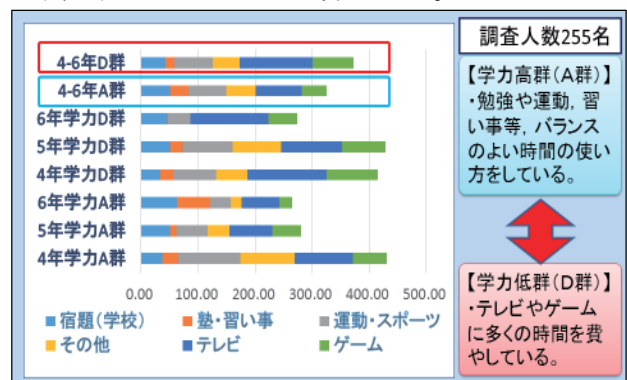


図2 学力A群と学力D群の時間の使い方の比較

②教員と保護者に対して、児童の実態や課題を把握してもらうための情報を提供する。

#### ○教員全体研修会の実施

4月の一般研修で、全教員に対して、児童に行ったアンケートの分析結果や、5年生での先行実施についての情報提供を行った。全教員に児童の



家庭における生活・学習習慣に関心を持ってもらうため、児童の家庭での時間の使い方を具体的なデータで提示し、同学年の教員で児童の実態に対する意見交流を行う時間を設定した。



写真1 教員研修会の様子

○PTA総会での学力向上に関するプレゼン発表

PTA総会での学力向上に関するプレゼン発表では、①志免町教育政策である学力向上プラン、②本校児童の学力と生活・学習習慣の実態、③学校での指導の実態という3つの柱で説明をした。また、保護者に対して、家庭学習の時間の設定や睡眠時間の確保に焦点化し、家庭での協力を求めた。PTA総会でのプレゼン発表では、在籍校で初めて取り上げられたこともあり、説明後保護者がアンケート用紙に多くの感想を記入する姿が見られた。

#### 【考察①】

教員全体研修会では「本校児童の生活・学習習慣が、学力に影響していることがよく分かった」「データで課題を提示されると、説得力がある」「全教員で、児童の家庭での過ごし方の指導の統一を図っていきたい」等の声が聞かれた。一方学力向上コーディネーターがPTA総会で行ったプレゼン発表では、「まずは家庭で生活習慣から整えていく必要があると感じた」「学校では、先生方が、児童に対して家庭学習の指導をどのように行っているのか知りたい」等の感想が見られた。教員全体研修会やPTA総会のプレゼン発表を通して情報提供を行う機会を設定したことは、教員と保護者が児童の家庭における生活・学習習慣に関心を持ち、実態や課題を把握し、指導の方向性を決める上で、効果的であったと考える。

(2) 学校と家庭の役割の明確化と推進組織の編成

#### 【学校と家庭の役割の明確化を図るマネジメント】

- ・学校や家庭で取り組む内容の整理
- ・学校での取組の担当者の決定
- ・取組を推進していくための組織の編成
- ・スケジュールカードの作成と指導
- ・生活・学習ナビの作成に向けた日程調整

①児童の生活・学習習慣の改善に向けて、学校が担う役割と家庭が担う役割を整理する。

学校と家庭それぞれが取組をスタートさせるために、学校と家庭の役割を整理した。学校においては、主に学力向上コーディネーターが実践しなければならないこと、他の教員とともに実践していかなければならないことの2つに整理した。

#### ○学校が担う役割

【学校が担う役割】
<b>【学力向上コーディネーターがすること】</b> <ul style="list-style-type: none"> <li>・児童のデータの収集と分析</li> <li>・PTA総会での児童の実態の説明と協力依頼</li> <li>・教員研修会のマネジメント</li> <li>・児童の生活・学習習慣に関するHPの作成</li> </ul> <b>【各担任や学力向上部の教員とともにすること】</b> <ul style="list-style-type: none"> <li>・データを活用した授業実践（生活習慣の改善や学習習慣の確立を目指す学級活動）</li> <li>・スケジュールカードの活用に関する指導</li> <li>・生活習慣や学習習慣の改善を図る環境整備</li> <li>・生活・学習ナビ（学校編）の作成と活用</li> </ul>

昨年度の2月から、5・6年生の教室に入り、学力向上コーディネーターが中心となって、校内の学力向上部の教員や学級担任と協力しながら、学級活動における授業実践を行っている。在籍校児童の課題は、テレビやゲームの長時間化、睡眠時間の不足、家庭での自己選択学習における内容の偏りである。授業実践においては、学級ごとに調査した学習時間、テレビやゲームの時間、就寝時刻等のデータを提示して自分の時間の使い方に関する課題に気付かせ、もっと時間の使い方を工夫することはできないかという視点で考えさせることにした。また、家庭学習を自主的・計画的に行えるようにするため、自己選択学習の目的、方法や内容等についても指導を行った。

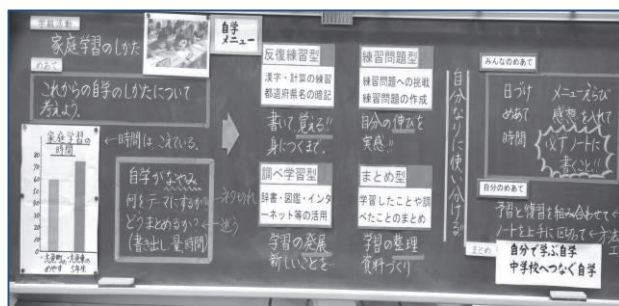


写真2 学級活動における授業実践の板書

授業実践後には、授業で使った資料等を用いて掲示物を作成し、学年の掲示板に掲載している。また、授業実践の様子や児童のデータは、在籍校ホームページ (<http://www.town.shime.lg.jp/site/hs/>) で紹介し、保護者への情報発信として活用した。

夏休みには、全教員で生活・学習ナビの作成を始めた。生活・学習ナビとは学校と家庭が、子ども達に身に付けさせたい習慣についてともに



写真3 研修会のマネジメント

考え協力し合うためのガイドブックである。学校では、学年主任者会や全体研修会等での意見交流を重ね、12月末までの完成を目指すことにした。

#### ○家庭が担う役割

【家庭が担う役割】	
【学力向上コーディネーターがすること】	
・スケジュールカードの作成	
・スケジュールカードのチェックと記入	
・生活・学習ナビの作成に関するマネジメント	
【各家庭で保護者がすること】	
・生活習慣の改善への支援	
・家庭学習の習慣化への支援	
・スケジュールカードのチェックと記入	
・生活・学習ナビ（家庭編）の活用	

児童の生活習慣の改善と家庭学習の習慣化を目指すため、スケジュールカードを作成した。児童へ活用の仕方を指導するとともに、ホームページや学級通信を用いて、各家庭への協力を求めた。一方、生活・学習ナビの作成においては、子ども達の実態に合ったナビにするために、教員で話し合った内容を保護者に説明し、保護者からの意見も取り入れながら作成を進めた。

#### ②教員と保護者が取組を推進していくための推進組織を編成する。

学校と家庭がそれぞれの役割を踏まえ、取組を推進していくことができるよう、学力向上コーディネーターを中心とした推進組織を、図3、図4のように編成した。



図3 学校での取組を推進していくための組織

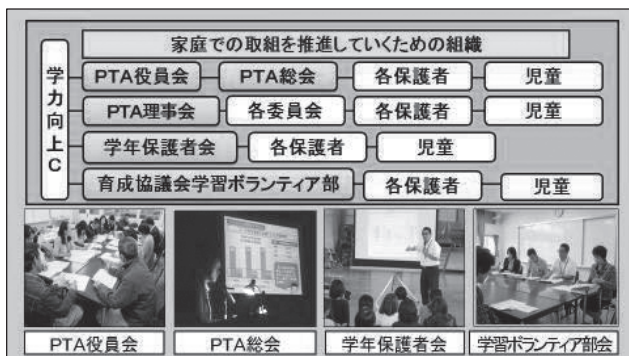


図4 家庭での取組を推進していくための組織

在籍校においては、学年主任者会で、毎月学力向上プランの取組の評価を行い、翌月重点的に取り組む内容を決定している。本年度も学年主任を中心に、各担任が学力向上の取組を進めている。また本年度は、研修部との協力により一般研修に児童の習慣の改善に関わる内容を取り入れたり、学力向上部による学級活動における授業実践を行ったりすることにより、取組の充実を目指した。

一方、各家庭での取組を推進していくための組織は、これまで具体的に編成されていなかった。そこで、本年度は家庭との連携を強化するため、学力向上コーディネーターが、保護者を中心としたPTA役員会や学年保護者会に、積極的に参加し、学校での取組の紹介や各家庭への協力依頼を行った。また、青少年育成協議会の学習ボランティア部会にも参加し、生活・学習ナビの作成について意見を集約し、作成に生かした。

#### 【考察②】

学校と家庭の役割を整理し、取組を推進していくための推進組織を編成したことで、学力向上コーディネーターとしての具体的な方策や働きかけの対象がより明らかとなった。現在では、学力向上コーディネーターを中心とした授業実践や教員全体研修会の実施等、学校の取組は組織化されている。しかし、学校での取組や組織づくりが進行している一方で、家庭との連携に関しては、家庭からの意見を取り上げにくい、保護者の協力という点で個人差が大きい等の課題が残されている。今後も、家庭との連携を強めていくためには、学力向上コーディネーターが、学年保護者会やPTA役員会等に参加し、保護者の話を直接聞いたり学校からの情報発信を継続的に行ったりする必要がある。

#### (3) 学校と家庭の協働実践に対する支援

##### 【学校と家庭の協働実践におけるマネジメント】

##### 【児童に対して】

- ・スケジュールカードの作成と配布
- ・児童に対するスケジュールカードの使い方の指導
- ・週1回のカードの回収とコメントの書き込み

##### 【教員に対して】

- ・各学年担任との協働による掲示板の作成
- ・各担任と学力COによる個別指導の検討
- ・生活・学習ナビの内容についての話合いの設定

##### 【保護者に対して】

- ・学級通信やHPによる保護者への説明と協力依頼
- ・生活・学習ナビの印刷と配布

#### ①スケジュールカードを作成し、活用を促す。 ○スケジュールカードを活用した全児童への支援

5・6年生の児童においては、毎日スケジュールカードを書き、1週間ごとに保護者、担任、学



力向上コーディネーターの順で、アドバイスを書き込むというシステムが確立している。昨年度からこの取組を続けてきたことで、6年生児童全体で、テレビやゲームの時間が減少し、学習時間が増加するという変化が見られた。スケジュールカードの活用を始めて半年が経った頃（11月）、6年生児童の複数の保護者からは、「テレビやゲームに使っていた時間が短くなったので、読書や自学など、宿題以外の学習に関しても時間を確保してほしい」「お手伝いをして、家族や自分の将来に役に立つような時間の使い方を考えてほしい」といったコメントが多く見られるようになった。

そこで、学力向上コーディネーターが担任との協議を行い、6年生児童のスケジュールカードには、児童の目標や夢の実現に向けて費やした時間を書き込む欄を設けることにした。一方、5年生児童は、スケジュールカードの提出が不十分な児童が多かったため、現在のスケジュールカードの提出を定着させることにした。また、後期から生活・学習習慣チェックを始める4年生においては記述が簡単で取組期間を限定したカードを活用させることで、自分の家庭での時間の使い方を見直し改善を図る取組を進めることにした。

#### ○改善が見られない児童への個別支援

スケジュールカードを活用し、家庭での時間の使い方を継続的に指導する一方で、子ども達の生活・学習習慣における変化を分析した。6年生児童を対象にした平成25年11月、平成26年6月、平成26年9月の3つのデータを用いて、A群とD群の時系列的な変化を比較してみると、図5のような結果になった。

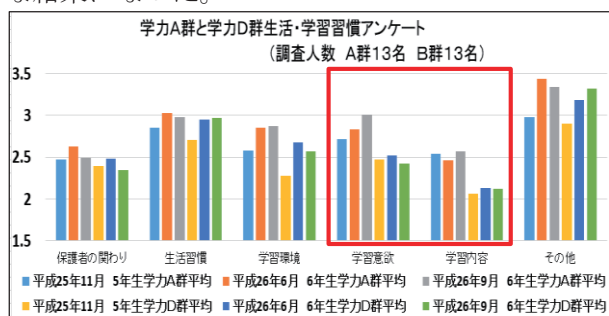


図5 学力A群と学力D群の比較

児童の実態について2つのグループには、大きな違いが見られる。夏休み明けの9月の結果では学力A群の学習意欲や学習内容は、夏休み前の6月より上昇しているにも関わらず、学力D群は下降しており、0.5ポイント以上の差が出ていた。長期休業中は、児童がほとんどの時間を家庭で過ごすため、家庭での親の接し方や児童の時間の使い方によって差が出やすいことが起因していると考えら

れる。さらに学力D群の状況を細かく分析するとアンケート結果において、図6のE児のように、改善傾向が見られない児童が存在していることが分かった。

平成25年11月						
	保護者の関わり	生活習慣	学習環境	学習意欲	学習内容	その他
A児	欠席	欠席	欠席	欠席	欠席	欠席
B児	2.20	2.40	2.20	1.83	2.00	2.50
C児	2.20	2.00	1.60	1.50	1.86	2.50
D児	1.60	2.60	1.60	1.50	1.57	2.75
E児	2.20	2.80	2.80	1.33	1.71	2.00
平成26年9月						
	保護者の関わり	生活習慣	学習環境	学習意欲	学習内容	その他
A児	2.40	3.20	2.20	2.00	1.43	3.50
B児	2.40	3.20	2.60	2.50	2.14	3.50
C児	2.00	2.00	2.00	1.50	1.43	2.50
D児	2.60	3.40	2.00	2.17	2.00	3.75
E児	1.60	3.00	3.00	1.83	1.29	1.75

図6 改善が見られない児童のアンケート結果

これまで行ってきた集団指導では生活・学習習慣が改善できない児童に対しては、個別指導の工夫や改善が必要である。そこでこれらのデータを学力向上コーディネーターが各担任に提示し今後の指導の方向性について話し合った。特にE児に関しては、保護者と担任が面談を行い、早寝・早起き、朝ごはん、挨拶、お手伝い、学習時間の確保、テレビやゲームの時間の設定など、E児の課題に合わせた内容で細かくチェックできる表を作成した。E児は、毎日その表で自分の生活・学習習慣を記録し、保護者のコメントをもらった後、学校に持ってきて担任からのコメントをもらうという取組を継続的に続けている。



写真4 学力C児と担任

在籍校では、標準学力調査の正答率が40%以下の児童を対象に、個別の学習支援を行っている。この支援は、担任教師が担当する児童と学習プリントが綴じられたファイルのやり取りを通して、家庭学習のチェックを行い、学習の理解度に合わせて毎日課題を出すというシステム（算数パスポートと呼んでいる）である。E児のように、生活習慣や学習習慣に改善が見られない児童と、算数パスポートを活用している児童は、重なっていることが多い。そこで、算数パスポートと生活・学習習慣のチェック表を1つのファイルにまとめることで、より効果的な指導ができると考え、現在算数パスポートの改善を進めている。

#### ②生活・学習ナビを作成するためのマネジメントを行う。

学年主任者会や学習ボランティア部会等における話し合いを重ね、生活・学習ナビが完成した。作成する際に、配慮した点は以下の通りである。

- ・ 掲示を考え、A4用紙1枚の大きさで作成した。
- ・ 発達段階を考慮し、学年ごとにキーワードを入れた。
- ・ 特別支援学級の先生方を中心に話し合った内容は、低学年の生活・学習ナビの中に取り入れた。
- ・ 項目を少なくするために、先生方の話合いで優先順位の高かったもので、文章を構成した。
- ・ 学習指導要領と司書教諭のアドバイスを参考にし、全学年、読書に関する項目を入れた。

生活・学習ナビは、子ども達の発達段階を考慮しながら、低・中・高学年に内容を分け、3枚作成して、児童に配布することにした。

### 【考察③】

スケジュールカードを活用してきたことで、児童や保護者から以下のような感想が得られた。

#### 【児童の感想】

- ・ テレビやゲームの時間を減らせば、早く眠れる。
- ・ 夕方は習い事や宿題、お手伝い等で忙しいが、自分のためになる時間をこれからも設定していきたい。

#### 【保護者の感想】

- ・ 時間を意識することで、家庭での生活が規則正しくなったと思う。続けてほしい。
- ・ ゲームの時間が減り、自分の将来を考えて時間の使い方を考えるようになったことが嬉しい。

児童と保護者の感想からも分かるように、スケジュールカードを活用したことは、児童の時間の使い方の工夫へと繋がってきている。在籍校児童の課題であったテレビ・ゲームの時間の減少と睡眠時間の確保に加え、児童が時間の使い方を自分でマネジメントしていく意識が高まったことが、学校と家庭との協働実践の成果であると考ええる。

一方、ナビの作成に関する教員の意見は、以下の通りである。

#### 【教員の感想】

- ・ 生活・学習ナビが完成したので、子ども達に指導しやすくなった。今後も習慣づくりに力を入れたい。
- ・ 休日や長期休業の前にも、生活習慣や学習習慣に関する指導を行い、ナビを積極的に活用したい。

生活・学習ナビは、教員にとって、生活・学習習慣を児童に指導していく際の指針になりつつある。今後の課題は、生活・学習ナビの効果的な活用である。教員だけでなく、保護者からの意見を取り入れながら、毎年学力向上コーディネーターを中心に修正を加え、より在籍校の児童の実態に合うものや活用しやすいものへと変化させていきたいと考える。

しかし、生活・学習習慣の改善については、児童によってその個人差が大きいという課題が残されている。また、小学校高学年では、自分の生活スタイルをなかなか変えられない児童がいること

も事実である。今後も、学力向上コーディネーターが、学力向上部や各担任等と一緒に、各学年の発達段階に合わせ、できるだけ早い時期から計画的に指導していく必要があると考える。

## 6 全体考察

以上のような取組を続けてきたことで、児童の時間の使い方や生活・学習習慣アンケートでは、図7のように、学習時間が30分以上増加し、テレビ・ゲームの時間が45分以上減少した。また4・5年生でも、同様の結果が見られた。

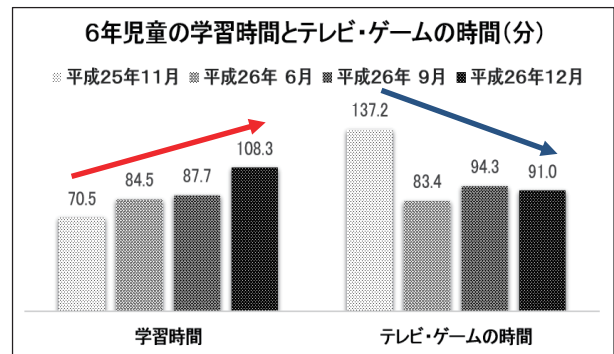


図7 6年生児童(94名)の家庭での時間の使い方

家庭学習においては、宿題だけしかしないと答えていた児童の数が減り、読書や自学などにも取り組む児童が増えたことで、家庭での学習時間の増加に繋がったと考えられる。テレビ・ゲームの時間については、全校児童に対して90分以内という時間のめやすを設定し、生活・学習ナビに書き入れたので、今後も、その徹底に向けた指導を充実させていく必要がある。

6年生児童の学力に関しては、図8のように、本年度の4月に行われた全国学力・学習状況調査において全ての教科領域で、県平均や全国平均を超える結果となった。前年度までの6年生と比較しても、在籍校児童の学力が、確実に向上してきていることが分かる。

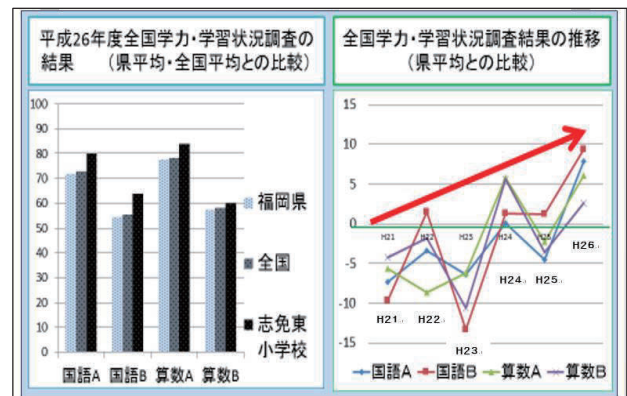


図8 全国学力・学習状況調査の結果

また標準学力調査（東京書籍）において、取組を始める前の平成25年12月と、平成26年12月の平均正答率（国・算・理の3教科）を学力階層別に比較すると、図9のようになった。学力A群の平均正答率は、90%を超えている。一方、学力D群の平均正答率は、1年間で12%上昇した。

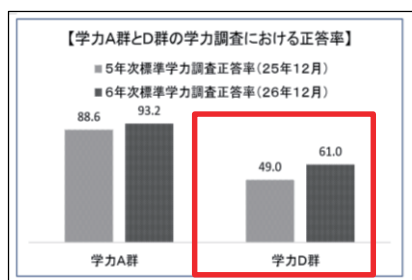
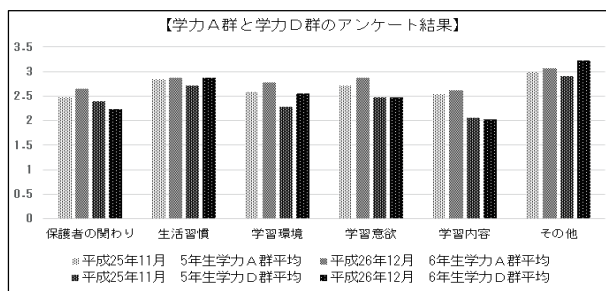


図9 学力A群13名と学力D群13名の正答率



学力D群児童のアンケート結果で、ポイントが0.5以上伸びた質問項目	平成25年11月と平成26年12月との比較
①毎日の夕食の時間は決まっている。	+0.53
②毎晩、就寝時刻が決まっている。	+0.60
③家で学習する時間は、決まっている。	+1.00
④テレビやゲームの時間は決まっている。	+0.60

図10 生活・学習習慣アンケートの結果

生活・学習習慣アンケートを学力A群と学力D群で観点別に比較してみると、学力A群は全ての項目でポイントが上昇していた。学力D群は観点別では保護者の関わりや学習内容に関する項目でポイントが下降していたが、図10のように夕食、就寝、学習、テレビやゲームの時間の決定に関わる細目では、0.5ポイント以上伸びていた。高学年児童にとっては、家庭生活の改善を図るために自分で時間の使い方を主体的に決定することが、有効な手立てであると考えられる。

学力D群の中には、標準学力調査（東京書籍）の正答率が、昨年度から15%以上も伸びた児童が13名中5名いた。この5名に共通して見られた変化は、保護者の声掛け、学習時間やテレビ・ゲームの時間の決定、そしてインターネットや学校の勉強の復習等の学習の幅の広がりにおけるポイントの上昇であった。

先行研究で浜野（2009）が指摘しているように「家庭での生活習慣や親の接し方は、子どもの学力に影響する」ということが、在籍校児童にも当てはまる。

## 7 成果と課題

### 【成果】

学力向上コーディネーターが中心となり、児童の課題の把握と情報提供、学校と家庭の役割の明確化と推進組織の編成、そして協働実践等の取組を、学校と家庭の連携を図りながら組織的・継続的に続けてきたことは、児童の生活・学習習慣を改善する上で有効であったと考える。また、児童の生活・学習習慣の改善は、児童の学力の維持・向上に繋がることが明らかとなった。

### 【課題】

課題は、児童の個人特性を配慮した支援システムの構築である。今後、個人の特性に合わせた指導の充実を図り、学校・家庭連携の更なる改善に向けた取組が必要である。また、本研究では低学年児童を研究対象としていない。4～6年生児童の生活・学習習慣を確立させるとともに、低学年児童へと研究対象を拡大し全児童への働きかけを行うことによって、学力向上コーディネーターを中心とした取組の充実に繋げていきたい。

### 主な引用・参考文献

- 浜野隆 2009 教育格差の発生・解消に関する調査報告書：分析編 家庭での環境・生活と子どもの学力 ベネッセ教育研究開発センター
- 田中勇作 2004 学校（教師）と家庭の連携の大切さ ベネッセ教育総合研究所
- 谷友雄・元兼正浩 2006 こうすれば学力は伸びる ぎょうせい
- 陰山英男 2003 学力は家庭で伸びる 小学館
- 江澤正思・陰山英男 2008 学力は1年で伸びる！ 朝日新聞出版
- 辰野千尋 2006 学び方の科学 図書文化
- 萩野義之 2011 秋田県式家庭学習ノート 主婦の友社
- 河村茂雄 2007 データが語る①学校の課題 図書文化社
- 河村茂雄 2007 データが語る③家庭・地域の課題 図書文化社
- 露口健司 2012 学校組織の信頼 大学教育出版
- 坂本七郎 2011 小学生の学力は計画力で決まる 大和出版
- 岸本裕史 2014 見える学力、見えない学力改訂版 大月書店

### 謝辞

本研究をまとめるに当たり、研修機会を与えて頂き、ご支援をいただきました福岡県教育委員会並びに、志免町教育委員会に心から感謝申し上げます。また、在籍校をはじめとして関係の諸先生方に、多大なるご協力をいただきました。ここに深く感謝申し上げます、謝辞とさせていただきます。